

# *The Queen* のイラストレーションと物語性：

## 19世紀イギリス女性雑誌研究〈2〉

松 本 三枝子

### 序

Samuel Beeton が、*The Englishwoman's Domestic Magazine (EDM)* の出版で大成功したことはよく知られている。ヴィクトリア朝時代の女性雑誌として、確固たる地位を維持しているこの雑誌を、実際に手に取った時に、現代の読者たちは驚きを禁じ得ないであろう。

月刊誌であるにも関わらず、A5版、約30頁の小雑誌である。中を開いてさらに驚くのは、その小さな紙面にびっしりと印刷された小さな文字である。2ペンスという月刊誌としては、安価な値段に設定して、読者層を広くつかもうとした、ビートンの編集意図は明らかである。1850年代の創刊であるが、ビートンが目指していたのは、マス・リーダーシップであり、ハード・カバーの高価な小説とは異なり、薄利多売の消耗品として、雑誌を位置づけ、認識している彼の先駆的な意識を示している。

2ペンスの月刊誌ではできなかったことは、多くあったろうが、*EDM* の10年後、1861年に出版された *The Queen* が、*EDM* ともっとも異なった点は、豊富なイラストレーション（以後はイラストと表記する）である。A3版という大判の女性向け週刊新聞であり、6ペンスという値段も、豊かな中流女性読者層を意識していることがわかる。

*EDM* で強調されていた、domesticity は *The Queen* においても継承されており、創刊号の“Review of the Week”からは、その編集方針が、家庭と国内の重視であることが明言されている。しかし、その後、その編集方針は、微妙に変質していく。*A Magazine of Her Own?* の著者である Margaret Beetham は、それを次のように分析している。

‘When we write for women, we write for home’ the *Queen* asserted in its opening number, but neither term meant here what it did in the *Englishwoman's Domestic Magazine*. This ‘home’ was neither the product of woman’s moral

management nor of her practical skills but a domestic theatre in which her femininity—defined in terms of beauty, dress and deportment—was displayed.

(Beetham 89-90)

家庭は、その女主人である主婦が、自らの女らしさを表現する空間であり、劇場と化す。EDMで重視されたモラルやディシプリンなどの理念は後退し、「いかに振る舞うか」は、もはや理念や倫理の問題ではなく、むしろ身体表現の問題となる。それゆえ、*The Queen* においては、女性の衣装や、室内装飾（クッションやスリッパなども含む）に関する情報は、重要なニュースであり、中産階級の家庭とその女主人である女性の価値は、大きく視覚性に傾斜することになる。

このような需要に応えるには、イラストが不可欠であり、もはや2ペンスの小版の月刊誌では到底無理である。それゆえ、*The Queen* にとり、イラストは、必要不可欠なものであり、この新聞の視覚重視の編集方針を象徴するものでもある。

しかし、既に論じたように、この女性新聞は、創刊号での編集方針とは異なり、実際には女性の関心を、家庭という私的領域から、公的領域へと向かわせるような紙面構成、記事内容となっている<sup>1</sup>。つまりファッションは、重要なニュースであるが、時事ニュースも同じようにイラストを付されて提供されている。

そこで、本論では、*The Queen* に掲載されたイラストを、その内容によって分類したうえで、分析を加え、この新聞の特徴を考察したい。

## I イラストの掲載数と内容による分類

適切な分類をするために、創刊号である1861年9月7日号から1ヶ月分をサンプルにとり、掲載されているイラストの内容と枚数を分析してみよう。

表1 イラスト掲載頁数と枚数

発刊日	1861.9.7.	1861.9.14.	1861.9.21.	1861.9.28.
総頁数	16	16	16	20
イラスト掲載頁数	9	7	8	11
イラスト枚数	21	23	16	28

9月28日号は、サプリメントがついているので、増頁になっているが、総頁数は、約16頁と考えられる。その約半分の頁に、イラストが掲載されていることがわかる。イラスト枚数が、イラスト掲載頁数より多いのは、1頁に複数のイラストが配置されていることを意味している。掲載頁数と、イラスト枚数の差が大きいほど、1頁中のイラスト枚数が多いことになる。

この新聞は、A3大判であるから、1頁大のイラストは、迫力があるし、贅沢なものである。一方、精緻に描かれた、小さなイラストが、1頁の中にいくつも配置される場合もある。特に、“needlework” や、“workbasket” と題された頁に掲載された、女性用衣服や、室内装飾用小物のデザイン、刺繍のパターンなどは、実に細密に描かれている。

ファッション・プレートと呼ばれたパリ発の流行通信は、“Expressly Designed and Executed in Paris for the Queen” とキャプションが付けられている。月2回のパリ発の高価なファッション・ニュースであり、カラーの別刷りとなっている。9月21日号では、帽子を被り手袋をはめ、手には笞を持った乗馬服の女性と外出着を着た女性が、1頁大に描かれている。手前には、芝があり、遠景には乗馬を楽しむ人々の姿があり、前景の女性たちはポーズをとっており、絵画風で、優雅な雰囲気が漂っている。現在の女性雑誌ならば、週末にドライブに出かける女性のファッションを掲載したグラビア頁にあたる。

次に考察したいのは、多岐にわたるイラストの内容である。上記の創刊からの4号をサンプルに、イラストの内容を分類してみよう。

まず、創刊号では、そのタイトルである *The Queen* に相応しく、ヴィクトリア女王の 아일랜드 行幸のイラストが、タイトル頁から掲載されている。次に焦点を当てられているのは、2件の鉄道事故の事故現場のイラストである。トンネル事故で、列車内に取り残された乗客を描いたものや、陸橋から脱線し、横転している列車から、投げ出された乗客が、担架に乗せられ救助されていく事故現場の状況を、生々しく描いたものである。これらは、いずれも報道のためのイラストと分類できる。

次は、“Going out of Town” と付けられたイラストで、休暇のために、ロンドンから脱出する人々が、大挙してロンドン橋を渡る姿が描かれている。テムズ川には何隻も蒸気船があり、こちらも乗客で一杯である。人々の表情は、あまりの混雑に既に疲れ、驚いているようで、休暇に出掛ける人々というよりも、何かから逃れ避難していくように見える。先頭に描かれて

いるのは、年の離れた夫婦が、新婚旅行に出掛けるところであり、既に疲れている夫に、年若な妻は、困惑を隠せない。この休暇シリーズは、次号にも続いていくもので、この時代の中産階級の人々の余暇の過ごし方が、おもしろおかしく描かれている。この時代の社会事情を描き、そのモードは、あるがままに事実を描くというよりは、社会諷刺画の系列にある。同時代の *Punch* を、想起させるイラストである。

そして最後が、ワークバスケット、あるいは針仕事を呼ばれた、リボン刺繍や、女性用小物のデザインや、パターンを描いたイラストである。

次に、9月14日号である。この号のタイトル頁は、プロシアの幼い王子と王女がくつろぐ姿が、描かれている。写真からのイラストと書かれている。このような肖像画に属するイラストも、特にタイトル頁には多い。これも分類としては、報道のためのイラストとする。ナポレオン3世の妃であるウジェニー皇后が、保養地ピアリーツで過ごす様子を描いたイラストが、鉄道事故現場での日曜のミサに参加した群衆を描いたイラストと上下に並んでいる。これらは共に報道のためのイラストと分類する。

さらに、休暇シリーズの続編で、保養地のマーゲイトでの人々が描かれている。ホテルでは、ベッドの数が足りずに、ソファで一夜を過ごす人がいるかと思えば、部屋さえとれずに、廊下や階段の手すりにもたれて眠りこける人々が描かれている。

しかし、この号で最も注目すべきイラストは、“Hops and Hop-Pickers”の記事に付けられたイラストである。記事は、この肉体労働に励む人々の様子をドキュメンタリ的手法で描いている。家族総出で、ホップを摘む様子や、仕事に疲れ、壁にもたれて眠る労働者の一家などが描かれている。このイラストは、1840年代の社会小説を想起させるような、問題提起型のイラストである。

通常では、中産階級の女性読者が目にする事のない人々の生活や労働を描いて、読者にわかりやすく提供することにより、女性読者の関心を、より広い公的領域へと向かわせるように促進するイラストである。このような記事には、イラストが極めて有効に働き、読者の理解を助けることになる。同時に、これらのイラストのモードが、真面目ではあるが、どこか笑いが含まれていることも見逃せない。それゆえこれらは、社会事情を扱い、諷刺を含むイラストに分類する。

第3号である、9月21日号では、タイトル頁の論説は、“Property Tied

Up”であり、夫が死後も妻の再婚に反対するために、再婚しないことを遺産相続の条件にするという、男性のエゴイズムに対して、批判的姿勢を貫いている。しかしその論説内容を和らげるように、“A Fish out of Water”とキャプションが付けられたイラストが掲載されている。それは、水夫が妻か恋人と思われる女性に付き添い、布地屋で服地を選んでいる様子を描いており、水夫の当惑した様子が笑いを誘う。

この号では、1862年の万博に向けて、展覧会場が建設されていく様子を描いたイラストが、報道のためのイラストに分類される。さらに、“London Interiors”と題された記事では、スピタルフィールドに住む絹織物の職工の一家に焦点が当てられ、一家をあげて働き、朝から晩まで長時間織物を織っても、決して貧困から抜け出せない人々が描かれている。これは、前述した、「ホップとホップ摘み人」と同系列に属する、社会問題提起型のイラストとしたい。

さらに、“Refreshment Rooms”と題された記事には、カントリーとタウンとが比較対照されている。前者では、郊外のピクニックで食事をする光景が描かれ、後者では、ロンドンの美術館の食堂での光景が描かれ、その混乱ぶりが読者の笑いを誘う。これも社会事情、社会諷刺のイラストとしたい。

“Novelties Needlework”では、ズアーブ・ジャケットのイラストが大きく描かれて、縁取りのクローシェ編みの模様がわかるほどに精緻である。

最後に、9月28日号のフロント頁には、Hollowayにある捨て犬収容所の大きなイラストが掲載されている。次頁には、a lucky dogからの投書もあり、ユーモアたっぷりに、この時代の捨て犬事情を語り、この慈善施設への寄付を募っている。

さらに、“A Dream at Sea”と題されたある紳士の物語では、恋人のために、北京まで、ティー・カップを買いに出掛ける紳士が、船室で見た夢が、イラストで描かれている。そこには、この時代の中国に対するイメージが、描き込まれている。また、“The Shooting Season”では、狩猟で疲れきった紳士と淑女の晩餐後の様子が描かれている。これらはいずれも、社会事情、社会諷刺を含むイラストに分類する。

報道のためのイラストでは、客船 The Great Western の海難事故と、“The Rugby Romance”と題された、法廷記事がある。いずれも複数のイラストが掲載されていて、この週の号では、中心となる事件であったことがわか

る。嵐に見舞われる大型客船グレート・イースタン号と、さらに遭難後の船内の様子が描かれていることに注目したい。つまり時系列で、海難事故をレポートするイラストを掲載している。

同様のことが、法廷記事でもいえる。「ラグビー・ロマンス」と題されたこの記事は、誘拐により息子を亡き者にして、資産を奪取しようとした男の犯罪が、関係者の証言により語られていき、イラストがそれを補っている。これらの報道を目的としたイラストは、客観性のみならず、物語性が付け加えられていることが、興味深い点である。そしてこの週は、ワーク・バスケットのサプリメントが付いている。また、1779年から1861年までの女性のファッションの推移を、1頁大のイラストで描いている。

以上検証してきた、創刊号から4号までに掲載されたイラスト内容をサンプルとして、イラストの分類を考えると、次のようになる。

表2 イラスト枚数と内容による分類

内容	発刊日			
	1861.9.7.	1861.9.14.	1861.9.21.	1861.9.28.
1. 報道	9	6	4	12
2. 社会諷刺・ 社会事情	2	7	5	3
3. ファッション	1	0	1	1
4. ワーク・ バスケット	9	10	6	12
計	21	23	16	28

このように分類を進めてきて、わかったことは、第1群の報道と、第2群の社会諷刺・社会事情のイラストの区別が、曖昧であることだ。前者は、客観性を重視しており、後者には物語性があると分類したのだが、全てではないが、重複することがある。

例えば、鉄道事故のイラストで、トンネル内の列車に取り残された女性乗客が不安気にこちらを見つめている姿が描かれている(図1)。このイラストは、事故報道のためのものであり、「乗客からの話に基づき描いた」とキャプションに付されているので、客観性と速報性を強調する報道のた

めのイラストである。しかし、読者の同情や共感を喚起する女性の乗客を描き入れることで、物語性が付加されていく。それは女性読者が、鉄道事故に関心を持つために必要な編集上の操作ということもできる。

社会諷刺や社会事情のイラストでも、同様のことがいえる。「ホップとホップ摘み人」や「スピタルフィールドの職工」のイラストでも、労働者階級の生活を読者に伝えるために必要な客観性と、1840年代の社会小説を想起させるような物語性が共存していることに気づく。

このように、創刊号からの4号、つまり4週分に掲載された全てのイラストを検証して、明らかになったことは、1. 総頁数の約半数にイラスト掲載がある、2. 内容別に4分類（上記表参照）になる、3. 客観性と物語性の共存するイラストがあることだ。

第1のイラスト掲載頁数からわかることは、この週刊新聞の特色が、視覚性の重視にあることだ。第2からは、イラストの多様性が浮き彫りになる。これ以後、この分類数は、さらに増加していくことが予想できる。第3にあげた客観性と物語性の共存については、次章でさらに検証を進めたい。

## II 客観性と物語性の共存、showing と telling

*The Queen* のイラストを分析した結果、客観性が真情であるはずの報道のためのイラストの中に、物語性が付加されていること、その一方で、社会諷刺や社会事情をレポートするイラストに、未知の世界を正確に読者に伝えるために不可欠な客観性と、社会小説の持つ物語性が共存していることが明らかになった。事実を客観的に報道する姿勢を、showing とすれば、そこに物語性を織り込もうとする姿勢を、telling と位置づけて分析を続けたい。

この客観性と物語性の共存、あるいは、物語性の付加の問題は、女性週刊新聞である *The Queen* の重要な特徴と仮定できるので、詳細に論述したい。

月刊誌の *EDM* と、週刊新聞の *The Queen* との最大の相違点は、ニュース報道の有無であろう。それは必ずしも、時事報道のニュースのみではなく、ファッションなどの流行通信もニュースである。つまり、最新のニュースを追うことは、月刊誌では困難であるが、週刊新聞にはそのような速報

性が可能であり、不可欠である。前述した列車事故を報道するイラストに加えて、この章では、アメリカの南北戦争についての戦況報道や、炭鉱事故の報道に用いられたイラストについて分析を加えたい。

南北戦争関連の記事は、“War in America”、あるいは、“American Affairs”、“American Difficulty”、“American Conflict”などの様々なタイトルで、かなり頻繁に報道されている。この中で、1862年3月8日号に掲載された、“War in America—The Battle of Mill Spring, Kentucky” (図2)は、1頁大のイラストに、南北両軍の激しい戦闘の様子が生々しく描かれ、客観性を重視した戦況報道のイラストといえる。銃剣を持ち戦闘に向かう歩兵隊や、うつぶせに倒れ込む兵士の遺体、負傷兵、横転し喘ぐ馬などが、表情まで読み取れるほど細密に描かれている。

しかしこれに比較して、同じ、“War in America”のタイトルで、1862年3月1日号に掲載されたイラストに、“Refugees from Southern Missouri” (図3)と、“Scene in the Military Market at Beaufort” (図4)がある。前者は、戦争により難民となった人々が野営する姿を描いている。中央には、焚き火があり人々はいかにも寒そうに暖をとっている、右手奥には、家財道具を積んだ荷車があり、左手の幌馬車にも、人影が見える。

後者は、駐屯兵を相手に、黒人男女や子供たちが、果物や野菜、鳥や豚などを売りに来ている活気にあふれた市の様子が描かれている。この2枚のイラストは、続きの頁に掲載されているので、対のものであるが、対照的なものである。難民の表情は、いかにも惨めであり、その衣服はみすぼらしく、同情を誘う。ポーフォートの駐屯地での市では、黒人たちの籠は果物であふれかえっている。黒人女性たちは、いずれも腕が太く逞しく描かれている。

これらの2枚のイラストは、前述した戦況報道のイラストとは異なり、生活感にあふれている。そこには人々の暮らしがあり、家族の物語を感じとることができる。焚き火で暖をとる疲れきった難民の家族と、兵士相手に、家畜や果物を売ろうとする黒人一家の物語が読みとれる。戦況報道のイラストが、showingを重視しているとすれば、これらはtellingが重視されたイラストといえる。

女性読者は、これらのイラストから、南北戦争を、遠く離れた外国の問題ととらえるのではなく、そこに自らと同じように生活する家族の姿を知ることによって、この政治問題に関心を持ち続ける。このような Samuel Beeton



の編集方針は、随所に見出される。

次は、イギリス国内で起きた炭鉱事故のイラストである。それは、1862年2月1日号の“Hartley Pit Catastrophe”と題された記事に付けられた一連のイラストで、事故の続報は、次週号でも扱われている。記事そのものは、事故原因の究明に焦点が当てられている。しかしイラストの焦点は、むしろ鉱夫の家族にある。事故が報じられてから、夫や息子の安否を求めて、徹夜で待つ人々が、焚き火の周りに集まっている姿が、暗闇に描かれている（図5）。次頁のイラストでは、地下からロープでつり上げられて来た遺体を人々が見つめている。さらにその下のイラストで、遺体は棺桶に入れられ運ばれていき、頁を繰ると、イラストは続き、その多くの事故死者が、家族に見守られて教会墓地に埋葬され、仲間たちも参列している光景が描かれている。

書かれている記事が、事故原因の究明であるので、それに付けられたイラストは必ずしもその内容に一致している訳ではない。大小併せて4枚のイラストは、死者とその家族に強調が置かれている。冷静で客観性のある記事に、イラストは犠牲者とその家族の物語を付け加えている。William Hogarthの*Harlot's Progress*や、*Marriage à la Mode*に、共通する narrative paintingsの手法が、ここにはある。

それは、社会事情を扱ったイラストにも共通する手法である。1861年11月23日号の“College Life in America”では、アメリカの高等教育機関での男女共学を、揶揄したイラスト、“Academic Groves of Antioch, U.S.”（図6）を付けている。そこでは、女子学生は、ユークリッドや、キケロを学んでいるというよりも、男子学生と見つめ合い、仲睦まじく愛を語らっている。Hogarthを想起させるような、辛辣な視線でアメリカの女子学生を描いている。

*The Queen*は、一貫して女子教育には理解があり、女性の地位向上には積極的な姿勢を表明している。しかし、このイラストは、*Punch*のブルーマリズム批判に通じるような嘲笑が感じられる。そして、その対象が、アメリカ女性であることも同様であり、看過すべきではない。権利の請求と自由を求める女性を、アメリカ女性と重複させて批判することで、読者の共感を得ようとしている。

次は、ロンドンの往来での交通戦争を扱ったイラスト、“Regent Circus”である。1862年2月8日号に掲載されたこのイラストは、馬車が激しく

行き交うロンドンの往来を、横断できずにいる女性たちに、手を貸し先導している男性を描いている。女性たちの衣服は、素早い行動には向いていない上に、子供を連れ、赤ん坊を抱いた若い母親の姿もある。さらに浮浪児の後ろ姿も書き加えられており、都市の情景をとらえている。

このような都市の情景を扱ったイラストは、これ以後も *The Queen* の特徴となっていく。それは都市空間が、人々の観賞の対象となっていく時期と重なっている。しかしここでは、都市の景観に焦点が当てられているのではなく、そこに暮らす人々が主役であることに注目したい。

あるがままに都市の景観を写し出す手法、*showing* ではなく、都市生活者の物語が語られる手法、*telling* に重点が置かれたイラストとなっている。

このようにイラストを分析してきた結果、*The Queen* のイラストの特徴は、物語性の強調または、物語性の付加にあるといえるのではないだろうか。本来であるならば、イラストとは、事実をあるがままに伝えること、*showing* の手法であるのだが、むしろ、*narrative paintings* とも呼ぶべき物語るイラストが、この週刊新聞の特徴となっている。

それではなぜ、*The Queen* のイラストにおいて、*showing* よりも、*telling* が重要なのだろうか。つまり、物語性とは、週刊新聞にとりどのような意味があるのだろうか。次章では、その点について、考察を深めたい。

### III 物語性の意味

この時代の月刊誌を始めとする雑誌の販売部数を左右していたのが、連載されていた小説であったことは、Richard Altick や J. A. Sutherland などの指摘もあり、よく知られている事実である。人気作家の小説を連載することは、雑誌の成功には不可欠であった。この時代の中産階級の女性たちにとり、読書は、最大の娯楽といっても過言ではない。小説の値段が高価であり、貸本屋を利用していた彼女たちにとり、雑誌や新聞は、手頃な出費で、気軽に楽しめる読物として、重要な位置を占めていった。

週刊新聞である、*The Queen* には、“A Strange Story” と題された物語が、掲載されることがあるが、雑誌における連載小説のような重要な位置を占めているものではない。ここではむしろ、小説ではなく、“Black Book” と呼ばれる事件簿、“Confidences” と題された投書欄、“French Gossip” という流行通信が、内包している物語性に注目したい。

*EDM*では、“*Conversazione*”と題された投書欄が人気を呼び、編集者と読者と間に一定の信頼関係が構築され、擬似親子関係、師弟関係のような意見交換がなされた。ある時は、恋愛相談であり、体罰問題であり、コルセット論争であった。これらの投書欄で紹介されている内容は、編者が要約して書いているので、どこまで事実に基づくものなのかは明らかではない。しかし、ひとつの投書を契機として、その問題に白熱した議論が続いていったことは事実である。

同様のことが、*The Queen*の“*Confidences*”や“*Answers*”でもいえる。1862年9月6日号では、鬘が話題となって、議論は盛り上がっている。1863年3月7日号では、“*Nervousness A Real Disease*”とあり、身体的、心理的ストレスが続くと、神経質（症）に陥るという健康問題を扱っている。神経質は、病気ではないと、考えられがちであるが、本人は苦しんでおり、病であるという議論が続く。1ヶ月以上症状が続いた場合は、専門医にかかる必要があると忠告をする投書もある。また、食事療法などの提案も、読者から寄せられている。

これらの回答が、どこまで役に立ったのかは、別にして、1通の投書を契機にして、読者間で議論の応酬があるというのが、特徴である。提起された問題を解決するというよりも、共有することに意味がある。つまり読者参加型のコラムが、*EDM*と同様に、*The Queen*でも健在である。

次に、“*French Gossip*”と呼ばれたパリ通信を見ておこう。これは、パリ特派員からのレポートである。ファッションのみでなく、広くパリを中心とした流行通信が、その内容である。例えば、古いホテルを壊して新しい住宅地が、パリに誕生したというレポートがある（Feb. 15, 1862）。パリでは、中層のアパルトマンが主流であるが、この地区の住宅は、イギリス風の戸建てが多いと伝えている。また、ルイ・ナポレオンは公私にわたり、その芸術性を発揮しているとのレポートもある（Feb. 22, 1862）。

さらに興味深いのは、“*Black Book*”と呼ばれたコラムである。愛人であった若い家政婦を、銃で殺害した男の事件（Sept. 7, 1861）、1400通の手紙を自分の保管庫に隠していた郵便配達人の事件（Sept. 28, 1861）、運河に入水自殺を図ったが、助けられたお針子の事件（Sept. 28, 1861）、持参金が少ないことに腹を立てた理容師が、妻に家庭内暴力を振るった事件（Sept. 28, 1861）、むずかる赤ん坊にジン酒を飲ませ、放置して死なせてしまった女の事件（Feb. 22, 1862）、偽占いで金銭を奪い取ろうとしたジプシー女の事

件 (Feb. 22, 1862) など、この時代の社会の縮図となるような事件が、長短色々あるが、約1段落で、簡潔に語られていく。

これらの事件簿を読んでいくと、この時代、1860年代の小説で扱われたテーマと重複することがよくわかる。それは、幼児殺しであり、不倫であり、家庭内暴力である。つまり、煽情小説と呼ばれた大衆小説のテーマである、不倫、重婚、暗殺、放火などの事件が、“Black Book”の常連であることがわかる。中産階級の女性読者層に向けた女性新聞としては、煽情小説の連載は、望ましいものではなかったろう。しかし女性読者がそれらの社会の暗部に強い関心を持っていたことは、煽情小説の人気からも否定できない事実である。事件簿は、そのような好奇心を満たすコラムとして必要なものであったと考えられる。

さらに重要なことは、そこに列挙された事件に登場する人物は、名前を持ち、場所も特定されていることである。被害者、加害者を問わずに、事件に巻き込まれた人間の物語が、そこには、明らかに存在している。

このように、“Confidences”、“French Gossip”、“Black Book”を、分析してみると、人気小説の連載はないものの、これらのコラムが、小説の代理となる物語性を内包していることに気がつく。

それは、showing という客観的、冷静な手法ではなくて、事件や情報に物語性を付与する、telling を重視した編集方針に通じるものである。そのような物語性により、読者の興味や関心を喚起し、女性読者が自らの意見を持ち、表明できるような能動性を促進する編集意図こそが、Samuel Beeton 時代の *The Queen* の特徴といえることができる。

## 結 び

以上のように、*The Queen* に掲載されたイラストを中心に分析してきた結果、客観性よりも、物語性が重視されたイラストの存在が、この女性新聞の特徴となっていることが、明らかになった。さらに、そのような物語性に注目して、分析を進めた結果、“Confidences”、“French Gossip”、“Black Book”などの人気コラムの存在が、実は、連載小説の代理として、物語性を補完する役割を、担っていることがわかった。

とりわけ、事件簿にあげられた数々の事件は、この時代の煽情小説のテーマと重複しており、短編小説を読んでいるような印象である。週刊新聞と

して、ファッションのみならず多くの時事問題を伝え、読者の関心を喚起するために、*The Queen* が選択したのは、イラストの掲載であり、それによる物語性の付加であった。しかし、そのような視覚重視のメディアでありながら、あるがままを伝えるという手法、showing よりも、事件に付随する人間にまつわる物語を語る手法、telling が、*The Queen* の特徴である。

*The Queen* におけるイラストと物語性の重要性については、Samuel Beeton の編集方針と深い関係があると思われるので、彼から E. W. Cox へ、出版社が変わっていく過程で、どのように、イラストと物語性の関係が変化していくのか、さらに検証を続けたい。

## 注

- 1 拙論「19世紀イギリス女性雑誌研究：*The Queen* (1861-63) 〈1〉」において、創刊号での編集方針の変遷については論じているので、参照されたい。

## Bibliography

### 第1次資料

*The Queen: An Illustrated Journal and Review*

### 第2次資料

Altick, Richard D. *The English Common Reader: A Social History of the Mass Reading Public, 1800-1900*. Chicago: Chicago U. P., 1957.

Beetham, Margaret. *A Magazine of Her Own?* London and New York: Routledge, 1996.

Beetham, Margaret and Kay Boardman (eds.). *Victorian Women's Magazines: An Anthology*. Manchester: Manchester U. P., 2001.

Clark, Bob. *From Grub Street to Fleet Street: An Illustrated History of English Newspapers to 1899*. Aldershot: Ashgate Publishing Limited, 2004.

Flint, Kate. *The Woman Reader 1837-1914*. Oxford: Clarendon P., 1993.

Freeman, Sarah. *Isabella and Sam: The Story of Mrs. Beeton*. London: Victor Gollancz, 1977.

松本三枝子「19世紀イギリス女性雑誌研究：*The Queen* (1861-63) 〈1〉」『愛知県立大学外国語学部紀要』第39号（言語・文学編）（2007），75-95.

McDonald, Peter D. *British Literary Culture and Publishing Practice 1880-1914*. Cambridge: Cambridge U. P., 1997.

Rickards, Maurice. *The Encyclopedia of Ephemera*. London; The British Library 2000.

Sutherland, J. A. *Victorian Novelists and Publishers*. Chicago: U. of Chicago P., 1976.

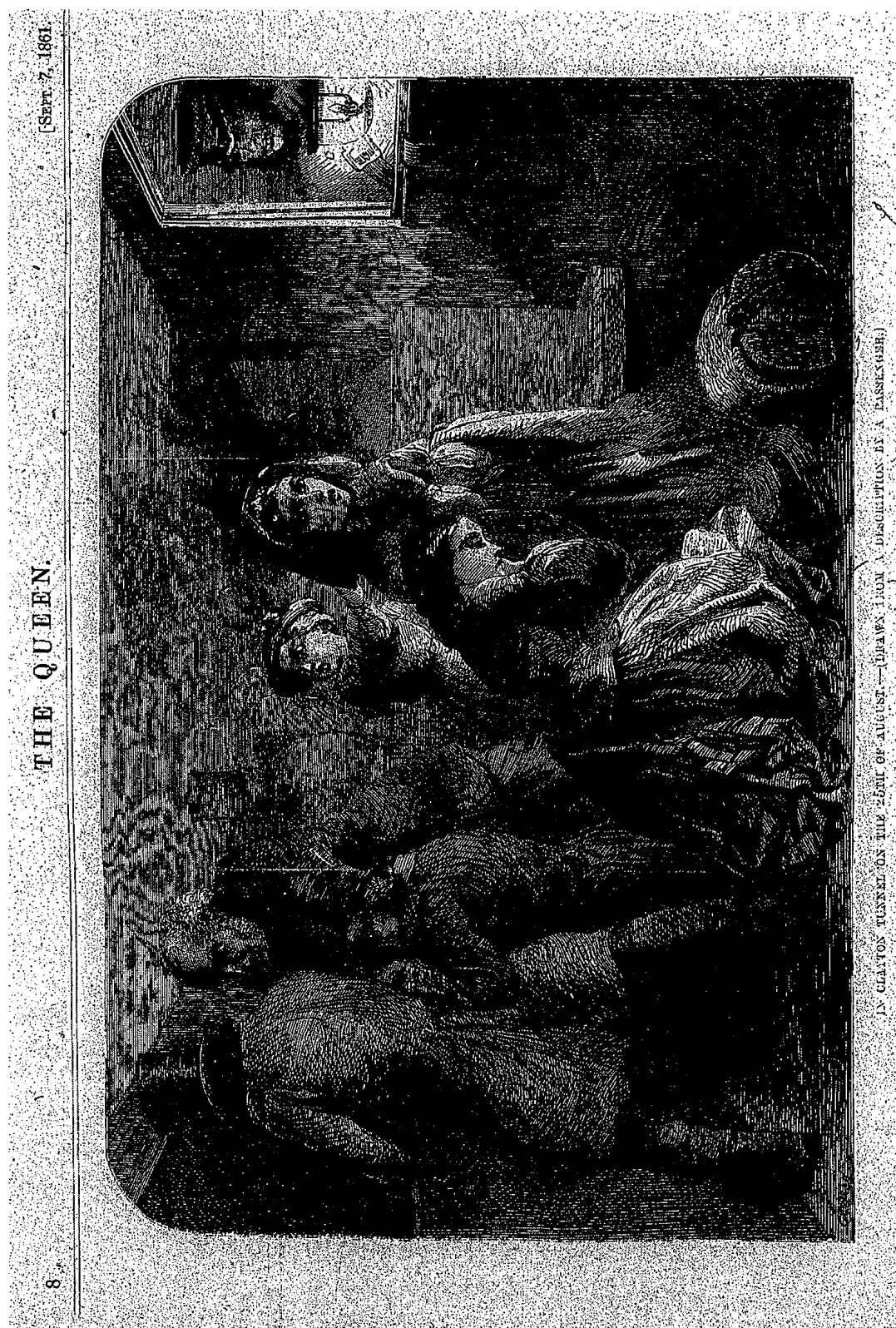


図1. トンネル事故、不安気な女性乗客 (The Queen Sept. 7, 1861)

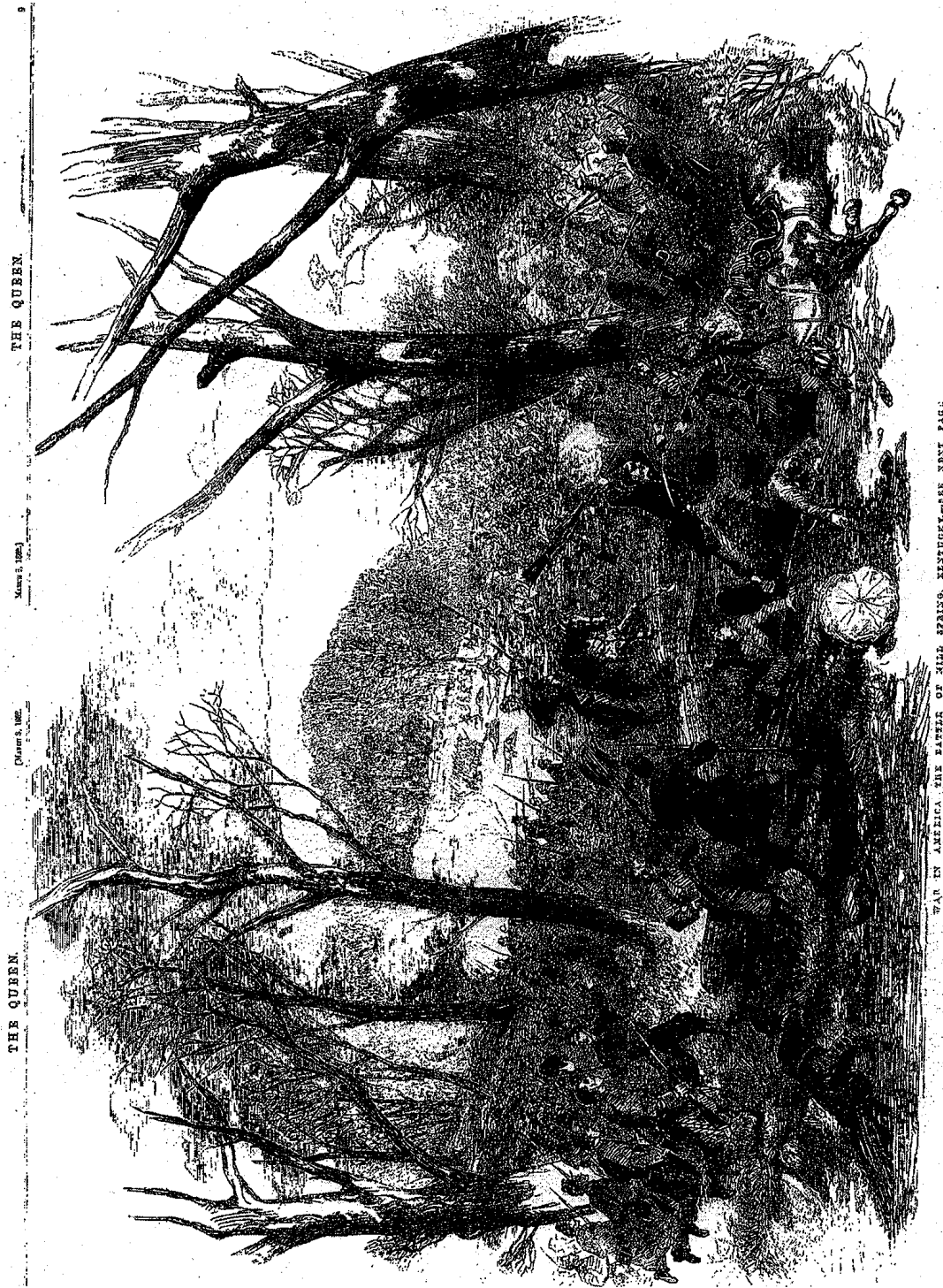


図2. 南北戦争、ミル・スプリングでの戦闘 (*The Queen* March 8, 1862)



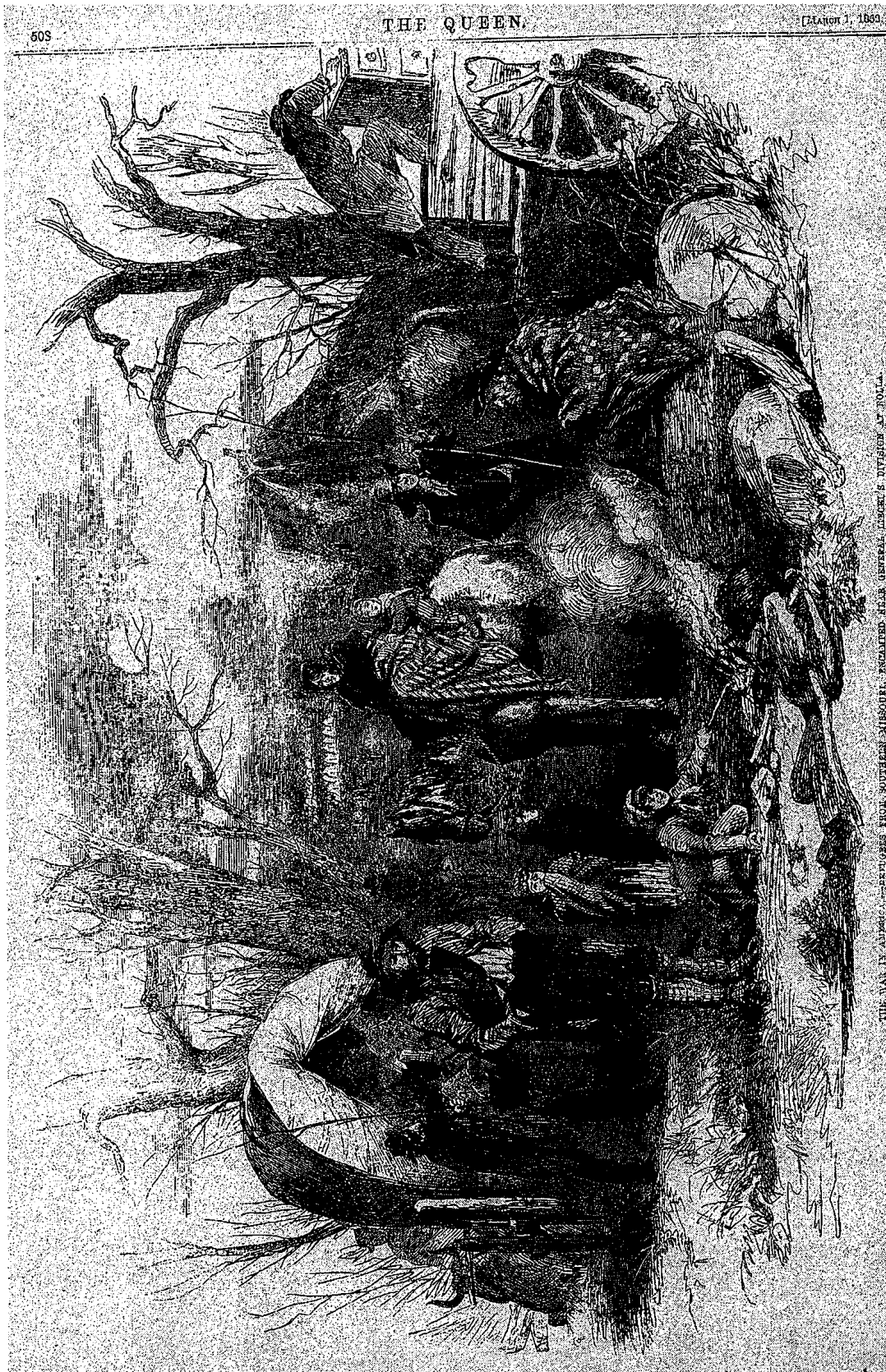


図3. 戦争による難民一家 (The Queen March 1, 1862)

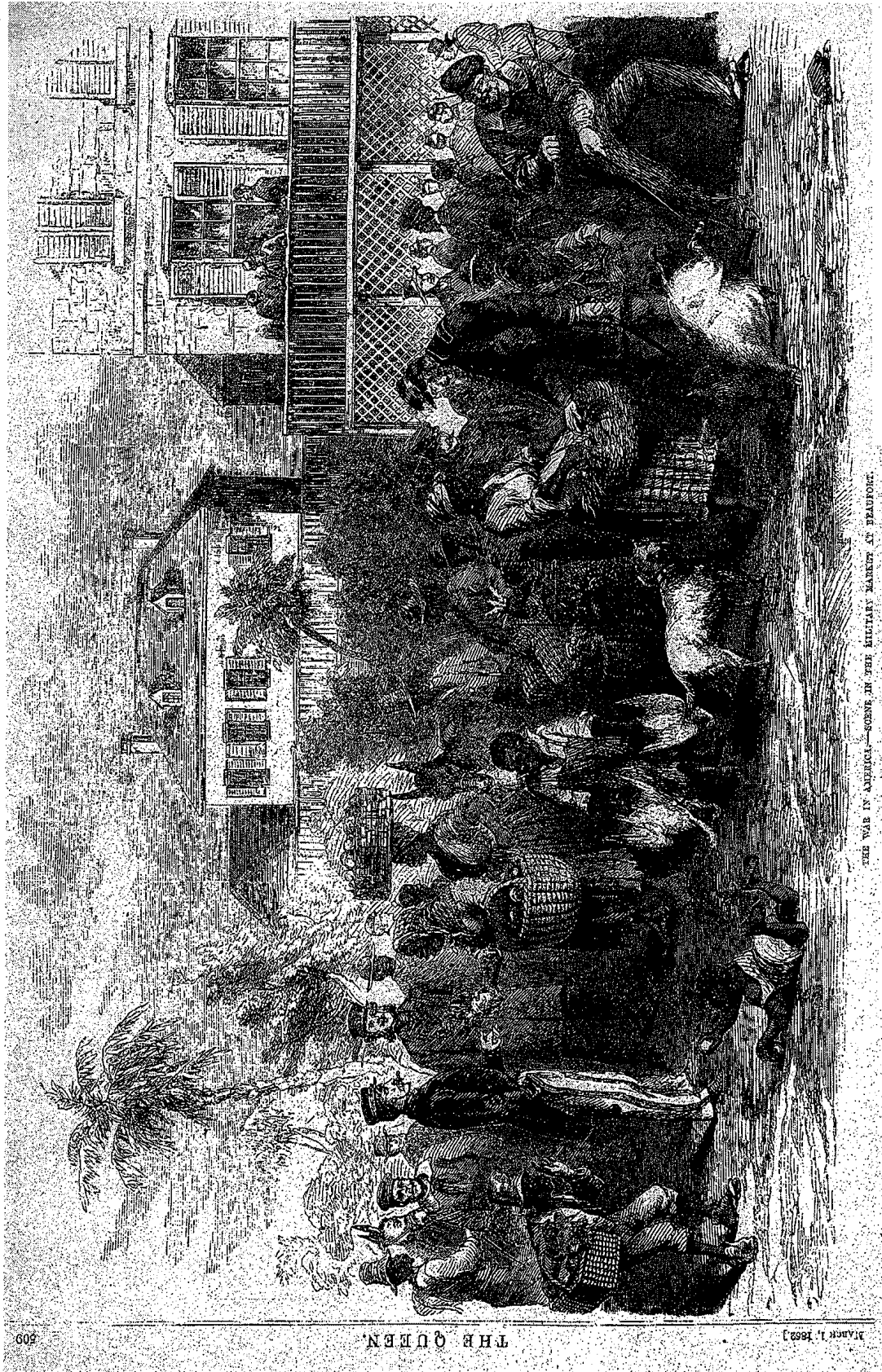
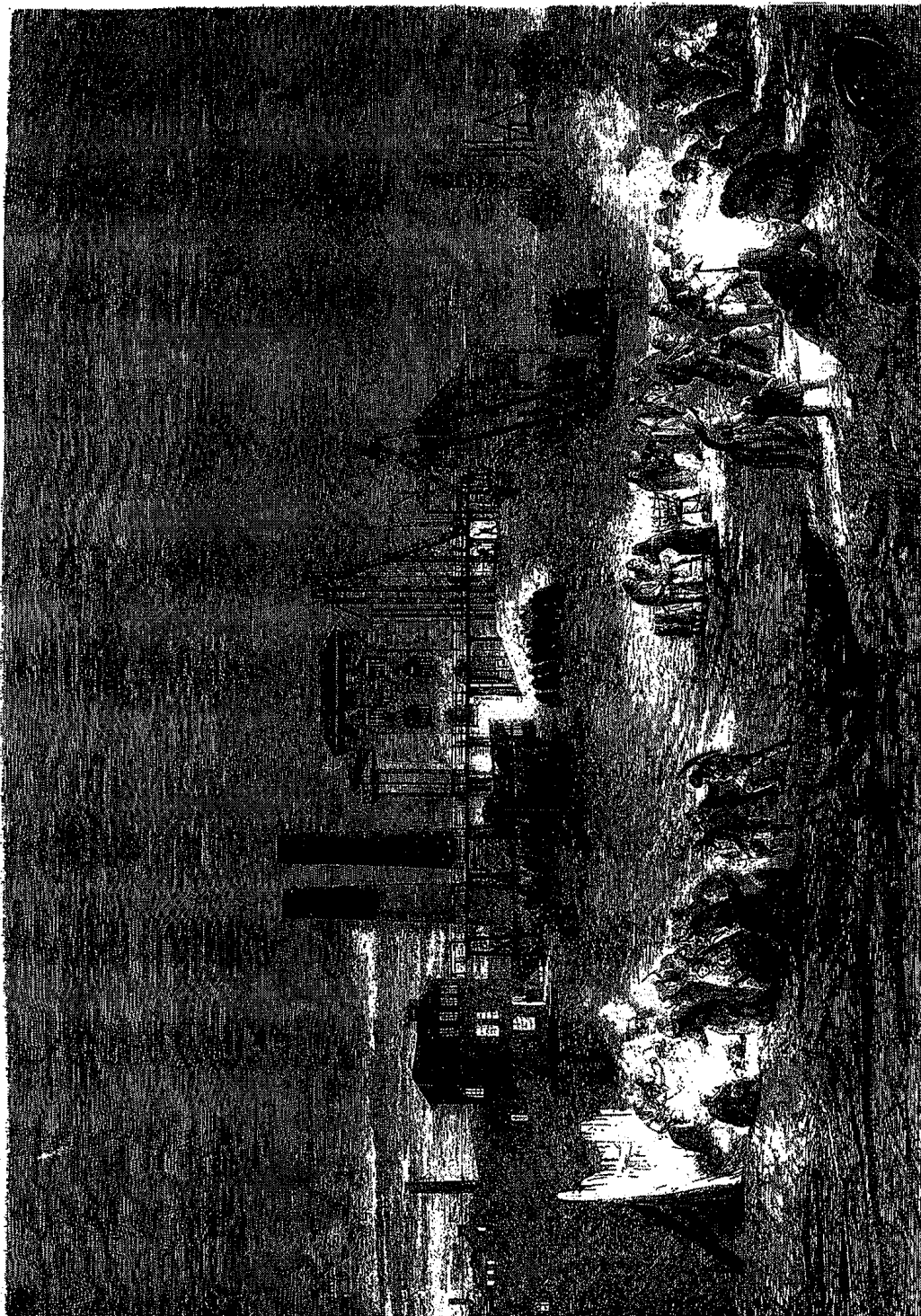


図4. 兵士の市場 (*The Queen* March 1, 1862)



HARTLEY. IPR.—SCENE ON THE NIGHT AFTER THE CAVANRODHE.

図5. 炭鉱事故 (*The Queen* Feb. 1, 1862)



THE ACADEMIC GROVES OF ANTIOCH, U.S.

図6. アメリカの女子大生 (The Queen Nov. 23, 1861)